

くらしの中で読む 『正法眼蔵』

——面授の巻——その三

小倉 玄 照

眼をみる

さて、仏法の単伝のありようを「面授」ということばで、道元禪師は示されたのですが、では、「面授」を完璧ならしむるためには、師と弟子とは、どのような態度で修行をすればよいのでしょうか。「面授」ということばはやや抽象的なきらいのある表現ですが、それを具体的な行動に移したらどうなるかと申しますと「眼をみる」という行為になります。

釈尊は、迦葉尊者をみることによって、その心を伝え、いのちの本質を授けられたということです。もちろん、この場合、みるのは、迦葉尊者の面(顔)ですが、面の全体というよりは、眼をみると言った方がよいかも知れません。

迦葉尊者も、釈尊をみます。弟子が師をみるときは、単にみるのではなくて、「礼拝奉観らいはいぶごんしたてまつる」のです。「礼拝」は、五体投地の拝ごたいとうちです。頭と両ひじと両ひざを地面につけ、ひれ伏して師を拝むのです。「奉観」は、まみえたてま

つること。敬意を内に秘めて相手の眼をじっと
みることで。

師の偉大さを信じきって大地にひれ伏して敬
礼し、次にすつくと立ち、背筋をまつすぐに伸
ばして、師の眼をじつとみるのです。それが「礼
拝奉観」です。朝な夕な、ことあるごとに弟子
は師に礼拝を行じ、師の眼を敬意を込めてみる
のです。「その粉骨碎身ふんこつさいしん、いく千万変といふこと
をしらず」というのですから、何年も何年も、
毎日毎日それを続けるのです。このようにして、
師のまなこをわがまなこにうつし、自らのまな
こを師のまなこにしつかりとおうつししようと
「礼拝奉観」の行をつづけていく間に、いつの間
にか師のまなこ（眼）と弟子のまなこが一体化
してしまふ——それが「面授」であり、面受である
と道元禪師は仰せになります。もちろんこれは、
自らの切実な体験の中から生じた教えです。

如浄禪師をみる

道元禪師は、正師を求めて貞応二年（一二二
三）、二十四歳のとき入宋されました。中国各地
の名刹に、これはとうとうわさの高い師を尋ね
あるかれました。およそ二年間をかけて、七人
の師を訪ねたと伝えられています。しかし、道
元禪師を心服させる師には出会えなかつたよう
です。『建撕記』は、その間の消息を次のように
記しています。

「この七人の長老達の眼睛、吾よりも劣れりと
思い給いて、さては日本大唐の間に吾れにまさ
れる大善知識はなけりと、大橋慢を起し、帰朝
せんと思ひ給うなり」（瑞長本）

この文章で、注目すべきなのは、道元禪師が
師の真贋を判別するに際して「眼睛」を問題に
しておられる点です。つまり、師のめんだまを
凝視することによって、正師であるかどうかを

直観的に見抜かれたということですが。これは、存外、昔から伝えられた人間を判別するための常套手段であつたのかもしれませんが。

もはや帰国もやむなしと、覚悟を決められた道元禪師に、老璉らうしんという一人の中国僧が、言いました。

「大宋国裡に知識多くましませども、如浄和尚ただひとりのみ明眼の知識なり」（『建擲記』へ瑞長本）

と。眼がしやんとした人物だから、ぜひ如浄禪師に会つてみる、と勧めたわけです。道元禪師は、あまり乗り気ではなかつたようですが、たまたまそのころ如浄禪師が天童山の住持職を拝命したために、道元禪師との出会いの場が生まれました。まさに「希代不思議の機縁」（『建擲記』へ瑞長本）というべきでしょう。

お二方の初めての出会いには感動的なものでした。『建擲記』は、

「師（道元）初めて浄和尚に見え、浄、一見してはなはだこれを器重す」（延宝本）

と簡潔に記してはいますが、両者の眼と眼が至近の場で交叉したとき、たちまちに両者のかたい信頼関係が成立したのです。

そのときの感動を「面受」の巻の冒頭に、道元禪師は、

「大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙高台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。そのとき、道元に指授面受するにいはく、仏仏祖祖面授の法門現成せり。」

と「面授」の巻の冒頭に記しておられました。師と弟子が眼力のある場合は、最初の出会いで、師のまなこ弟子のまなこがぴたり一枚になつてしまう消息がうかがわれます。「いく千万変といふことを知らず」という「礼拝奉観」の修行は、師と弟子の眼がぴたり一枚になるとい



う目的のために行ぜられるようにうかがわれる表現ですが、単にそういう有目的な行でもないのです。如浄禅師と道元禅師の場合は、最初におたがいがみたときぴったり一枚になり、それ以後「いく千万変といふことをしらず」という「礼拝奉覲」の行が続けられたのを見落としてはなりません。

母と子の場合

三歳児のY君は、やたらに友だちに噛みつきます。弟のT君は一歳児ですが、これもよく友だちに噛みつきます。弟の方は、友だちの手や足が、口に触れると、咄嗟にかぶつと噛みつくのですから、担任の保母さんは気が気ではありません。両親は、共かせぎで二人とも夜十時を過ぎなければ帰宅しません。きつと、お母さんの肌に十分触れて育っていないから、人肌のぬくもりに飢えていて、そういうぬくもりが口の

あたりに近づくと思わず本能的に噛みついてしまうのでしょうか。

Y君やT君の心情を思うと、かわいそうな思いにかられます。しかし、噛みつかれる方の子どもは、いい迷惑なので何とかしなければなりません。Y君は、もう三歳になっているのだから、少しは聞き分けが出来るかもしれぬと思って、或る時、友だちに噛みついた時、タイムイングよく現場にかけつけて職員室に連れて来ました。「地震かみなり火事おやじ」級の園長イメーヂを子どもたちは抱いているらしく、悪いことをしたときに私にみつかると大概の子は泣き出します。Y君も例外ではありませんでした。

しかし、職員室でY君と話をしていますぐに気づきました。叱られているときはもちろんですが、心おだやかになっているいろいろ約束ごとの話をしていても、いっこうに眼を私の方へ向けません。キョロキョロとあらゆる方向を視線はさ

まよっているのです。これはどうも新生児のときの授乳から誤っていたのではないかと私どもは想像しました。こういう場合、つい單純に人工栄養を疑うのですが、このごろは、母乳の大切さが喧伝けんでんされていて、完全に人工ミルクで育つた子は、めつたにいません。Y君も、粉ミルクで補充しながらも、そこそこには母乳も飲んで育つたようです。

せつかく母乳を与えながら、お母さんはテレビをみていたらしいのです。新生児には視力があるのかわからないのか、医学的にはいろいろ論議があるのでしょうか、たとい視力がないにしても、お母さんは赤ちゃんの眼をみながら授乳をするのが自然だと私は思います。ロブソン（一九六七）は、「人生初期の六ヶ月以内の見つめ合いが、母子関係に大いに影響する」（『まなざしの心理学』福井康之著、創元社、昭59）ことを強調しているそうです。「目と目の接触は、乳児にとつ

て人間どうしの接触の根源となり、社会性の出発点となる」（同書）らしいのです。

赤ちゃんのつぶらな瞳の奥に、その心を読みとろうとお母さんがつとめながら授乳をしてやらなければ、赤ちゃんは心満たされないのでしよう。見えない目でお母さんの瞳を捜し求めている赤ちゃんの心情はけつしておだやかな筈がありません。お母さんのみつめていらっしゃるテレビの音の方に見えない眼を求めてキョロキョロしている間に、視線の定まらない子どもになつて行くのでしょうか。

そういうえば、母乳だけで育つたという三歳児のA君も、行動が乱暴でききわけの悪いところがあります。私の手もとに呼んで話をしてみるのが、いつも視線があらぬ方向に向いています。

「おい、A君よ。園長先生の眼をみてお話しをしようや」

と、いえば一瞬、私の方をみるのですが、すぐに目をそらしてしまいます。

このごろとみに多くなつた多動傾向の子どもは、総じて視線を合わせて会話が出来ないようです。お母さんが、テレビを見ながら授乳して育てた子のような気がします。

すぐ、友だちに噛みつくY君やT君も、存外お母さんの乳房を噛みついた時、その痛みでハッとしてお母さんがテレビから赤ちゃんに目を移してくれる、その快感が忘れられないままに習性になつたとも考えられます。

いや、事態はもっと深刻なのかもしれません。母親が乳房を中心にした身体接触を十分保障し、ある程度の満足感を乳児に与えていないと、羨望の念が昂じて、乳房を拒否したり、不快、不満の原因を羨望のあまり、すべて乳房に投影してしまい、良い乳房までを駄目にしようと攻撃するようになる、という専門家の研究報告もあ

ります。（『まなざしの心理学』）

Y君やT君の場合は、お母さんが赤ちゃんの眼をみながらゆつたりとした気分授乳をしてやらなかった為に、乳房の肌ざわりと似ている友だちの肌にまで攻撃を加えるようになったと考えたほうがよいのかもしれませんが。

眼をみあわせることによって師と弟子が心を伝えることの大切さを強調された道元禪師の教えは、現代の育児にも反省を迫っているように思えます。